

最優秀賞（中学校の部）

D R E A M !

（課題図書：Fができない）【感想文】

茨城大学教育学部附属中学校 1年 海老根 理咲

「ぼくのFを出せばいい。」

この言葉に、はっとした。自分だけの音をせいいっぱい出すということに、身に覚えがあったからだ。

学校の文化祭で、私の所属する吹奏楽部は中庭で演奏をすることになっていた。時間が着々と進んでいく中、私には一つの悩みがあった。ある一曲で、私はホルンで highD を出さなくてはいけなかったのだ。一番と二番を押し、息を最大限速くして…出ない。このくり返しだった。

この主人公のチョコもそうだった。何度もFを練習しても思うように音が出なかった。それでもチョコは、田崎、カイト、ホットケ、そして岸野Tとの練習を積み重ね、本番でFを出すことに成功したのだ。

私の違うパートの友達も、同じようなことに悩んでいた。ソリの時、こんなに高い音を出すのか…と。同じ悩みを持つ仲間として、私たちはチョコたちのように何度も練習した。友達はめきめきと上達していったけれど、私はたまにしか音が出なかった。時間も少なくなっていく、それに伴って私のあせる気持ちもつっていくばかりだった。そこで私は、個人練習の時間にリップスラーをいつもより多くすることにした。これで少しでも出したい高音に近づけたらいいなと思ったのだ。

努力もむなしく、highDは出ないまま本番を迎えた。始まる演奏、少しずつ近づいて来る高音の出番…ここまで来たら、なるがままに…。

チャーン。

一際、高く澄んだ音が出た。え？今のは…自分が出した音？気づくのに時間がかかった。あっという間に友達のソリ。こちらも力強い高音だった。

チョコも、指立て伏せをして力をつけ、仲間と何度も練習し、本番でFの音を出せた。私も、リップスラーを何度も練習し、友達と励まし合い、文化祭で highD を出すことができた。

大切なのは、「自分の音」を出すことなのだと、本と体験を通して気づくことができた。努力を積み重ね、成功体験を修める。その大切さ、大変さを知った。

チョコにとってのFが F R I E N D S、友達の「F」だったように、私にとってのDがなんだったのか考えてみた。何度も何度も目標に向かって出したD。その私だけの音はきっと D R E A M、夢の「D」だ。目標を見つめ、出せた「私」という個性のDは、これからも私の中で響き続けていくのだろう。それを大切にしたい。

私の夢は薬剤師になることだ。そこまでの道のりはまだ遠く、見えないものばかりだ。チョコたちのように「もうダメかも」と思ったり、うまくできず挫折しそうになるかもしれない。そんなとき、この本と自分の highD を思い出してこう。何度もぶつかっていくうちに、きつとうまくいくはずだ。まぐれだとしても、一度成功してしまえばぐんぐん進んでいける。今まで出会ってきた仲間と、これから出会う仲間と、助け合い、補い合い、励まし合い、高めあっていきたい。進む道の先に、笑顔があるように。